

海軍

高雄海軍病院勤務

高雄空襲の惨状

愛媛県 森 田 隆 夫

大正十年七月十二日、今の北条市、愛媛県温泉郡正岡村大字八反地甲八五番地で中農の父母のもと生まれました。兄二人姉二人と私の七人家族でした。父は日露戦争に参戦、兄二人は中支・満州へとそれぞれ出征したので、私は青年学校へ通うかたわら防空監視のため三日に一度出ていました。その間、日給九十銭で近所の土建家の土木日雇人とし働き、父母姉を助けて家

業の農業の手伝いでした。

兄二人がいればこんなに働かなくとも済んだのですが、働かなければ生活ができぬというのが当時の農家の現状でした。村長は先頭に立って「働け、働かなければ日本は駄目になる」という、働け、働けの教育をしました。したがって働くことに自信がありました。

私は昭和十六年徴集兵で、昭和十七年一月十日、二十一歳、現役兵とし佐世保海兵団第八十一分隊へ入団、四等衛生兵となりました。自分には衛生関係の経験なし、何の知識もないのでとまどいましたが、三カ月の教育を受けることになりました。

入団二、三日は普通の生活で「私物等は故郷へ送れ」と言われ、その後は官物を身に付けました。「お前たちは、いよいよ大日本帝国海軍軍人だ」というこ

とで、実戦に即応すべく月月火水木金金（土・日曜なし）と休む日もなく、内務班では火花の出るほど厳しくしごかれ、外では銃を持って練兵場で鍛えられました。しかも、帰ればまた内務班で、軍人勅諭、手旗信号、掃除、洗濯です。

別課はハンモック（吊床）競争。吊床を畳んだり広げたりの競争で二十人より遅い者は早や駆けて兵舎の周囲十三回、そのまた遅い者は後三回駆けさせられる。そのときは汗と埃で目ばかりパチパチ。さらに、「お前たち気合が入らぬ」と、五分間で廁（便所）と廊下の掃除。

第八十一分隊は、初年兵ばかりで一〇五人、前から言われている、これが「鬼の海兵団」、つらい、こわいの言葉どおり「鬼」。これが毎日繰り返されて、新兵の三カ月の基礎教育を終えました。

四月十日、佐世保海軍病院の普通科入学、この日から衛生兵として基礎教育を受けることになるのです。看護法、止血法、薬学、外科、内科、病的（細菌、検便等の検査）と、あらゆる衛生法を六カ月間実務教育

を受け、昭和十七年十月十日卒業をしました。この間は気合は入れられないが「勉強タタ」と毎日特訓を受ける。私は薬学が得意、お陰で成績は良かったのです。卒業と同時に班長は「お前たちは本日付けで、馬公海軍病院勤務だ、佐世保軍港第六ブイに繋留中の『北安丸』に便乗して行け。書類はこれだ、気を付けて行け。不明な点は港務部で聞け」こんな命令と指示と受けたが他は何にも教えてくれない。

時は十月十日ころで、内地はもう秋祭のころ、ようやく「北安丸」に乗り込み、甲板にいと、東北弁で「呉鎮、横鎮はこつち、佐鎮そこにおれ、俺はこの船の甲板下士官だ、便乗中は俺の命令に従え」と便乗中の役割を決められました。

出港して日一日と暖かくなり、三日目夏服、四日目半袖防暑服となる。台湾も見え「あれが高雄だ」と、下士官はいう。そのうち高雄入港。「馬公へ行く者は、八号岸壁へ集合。時間がない走れ。『鳳山丸』という定期船のドラが鳴る。一同乗船。内地出発より七日目、馬公要港無事入港。夕食は、赤飯で祝ってくれました。

翌日から私は薬局勤務。入院患者、外来の投薬が毎日の仕事でした。院長のカバン持ちもしました。院長と一緒に自動車で各部隊を回る。行きは高級車に院長が乗っているからいいが、帰りは当番の私一人なので検問がある。証明はもらっているからいいが、心細いものです。

昭和十八年五月、転勤命令があり「本日付けで高雄海軍病院へ行け」と。沢山の方々の見送りを受け、一人で出発です。高雄でも薬局勤務。そのころになると仕事も覚え、ペースも決まって楽になりました。その後、配置転換で内科、外科、手術室などに勤務をしました。

昭和十八年十一月、フィリピン、バタン列島バビアンで検疫作業、南方行きの新兵、下士官の予防接種などが主たる勤務です。新兵とし入団以来二年九カ月で任官、昭和二十年五月一日、一等衛生兵曹（陸軍の軍曹）に任ぜられました。看護法競技会で一番で賞を授与され、高雄海軍病院の競技会でも一等賞を頂く（今でも賞品の「赤間石」の硯箱をもっている）。

高雄の空襲は、昭和十九年五月、B29超重爆撃機五、六機で偵察（二万メートル上空）に来るようになってしまった。十四、十五日ころ、毎日同じ時間（午後二時ごろ）に空襲を受けるのです。続いて夜間は照明弾、焼夷弾を交互に落とします。

我々の任務は負傷者の収容、治療。片手、片足なき者、腹に穴のあいている者もいます。痛くても、しびれているのか声が出せぬ者も大勢いました。中には手を貸せば歩ける者もいるが、担架に乗せ五分とたたないうちに死亡する者もいるのです。その有様を目の前で見ると気が立って「それ走れ」と叫んで、応急処置をとります。

その間食事はおろか、煙草一本も吸えない。歩いてはもどかしい、三步以上は駆け足、止血している間に死亡する者もいる。うめくだけで、無言で我慢している兵隊の心の中いかにばかりか、だれも知る由もなくいたわる時間もない。生地獄とはこのことか、肉親の者が見たら気も狂うことではありません。

数日後、また、高雄飛行場、第六燃料廠へ空襲があ

りました。B 29、機数も数えられぬほどの大空襲です、我が軍の迎撃機は一機もなく、高射砲はあれど弾はな（弾丸が敵機まで届かぬのだろうか）、兵隊も一般人も逃げるだけだが行く所もなく、木の下に隠れるだけです。防空壕も設備の良いものはなく数も少なく、それも避難者で満員です。

その時、我々部隊の四五度の方向より、B 29、四、五機が来て爆弾を投下してくる。あたかも、山羊の糞のごとくに所かまわず落ちてくる。防空壕の大半は破壊され、生き埋めの者、木の下では沢山の人が爆風で死亡しています。

空襲解除。「それ行け」と負傷兵の収容だ。私たち五名は焼野原の煙くすぶる中へと走った。ふっと若い母子を見付けた「頑張れ」と声をかけたが返事はない。母親は幼児二人を左手でかばうように自分の腹に引き寄せて、右手はかばうつもりか子供の背中へ、しかし母親の肩から臂まで、骨も肉もない。爆弾の破片か何かが直撃したのでしょうか。「お母さん」と言えぬ子供二人は爆風で死んだのか、紅葉のような小さな手を母

親の懐につけていました。父親はどこで何をしてたのか知る由もないが、私たちは涙をおさえ静かに見送りました。

その翌日、病院船入港、救助隊出発し患者をバス二台で病院船へ。乗船してみると、骸骨に服を着せたような兵隊に氏名を呼んでも返事がなく、目玉がかすかに動いている。顔の蠅を追う力もない兵隊。足の無い者、マラリヤにやられ高熱を出している者、栄養失調の者など、本当に悲惨この上もない有様でした。南方から戦傷病で内地遷送の兵隊を高雄港に降ろしたのでした。

破壊された飛行機、弾丸無き大砲、米軍のなすがままの毎日でした。昭和二十年七月末ごろより、米軍の空襲の回数が日一回と少なくなってきたので、我々一同はどうしたことなのかと思う日もありました。

（六月下旬、沖繩は玉砕、連合軍の目標は、台湾より本土ということになり、本土に対する空襲は激化してきた）

八月十五日、敗戦を院長から聞き、玉音放送がある

というので、「一同は中庭に集合せよ」と院長より指示があり、その旨のお話がありました。デマは飛ぶが私たちには次の任務が待っている。「一般邦人を全部内地に送還する準備をする。台中を中心に北は基隆、南は高雄へ集結すべく、また其の身の安全を守るべし」の命令の実施です。

米軍人、中国軍人、それに台湾生まれの住民、油断できない。身の回りの品物が、一分の油断で無くなってしまうこともあった。万全の注意をしながら、あちこちから高雄へ高雄へと集結してきました。若い女人は拉致されぬよう顔を黒く塗り、髪を短く切り、服は男性用の物を着るなど、手を尽くし、安全をはかるのに苦労しました。

全員集合し一安堵したら、出産する女性があり、蚊帳を張り、その中で無事男児出産。名を「高雄」ちゃんと命名、軍人も邦人も一応無事帰還準備を完了。当初の予想では、台湾は食糧があるので復員は遅くなる。南の方での食糧、衛生状態の悪い所は優先配船ということでしたが、昭和二十一年五月、高雄出帆、佐世保

へ入港しました。

我々病院関係者は、下船と同時に南方帰りの復員者の検便、検疫等、約一カ月間、復員業務を手伝い、無菌者は針尾海兵団からそれぞれ復員しました。父母、姉一人、兄一人が私を迎えに来てくれました。

高雄で会った兄も帰って来ましたが、奇しき縁と申しますか、彼が満州から高雄へ寄港したとき、海軍各部隊を聞いて回り偶然にも面会に來たのです。副官は「よく話をし合え、やる物があればやれ」と出港まで温情ある配慮をしてくださり、メレヨン島へ出発して行きました。

帰ってから兄の話では、高雄からメレヨン島へは八隻の船団を組んで出帆したが、兄の乗った一隻のみが助かり、他は沈没とのことです。しかし、メレヨン島では食糧補給なく二十一貫もあった兄の体重は帰国時は十二貫になっていたといっています。

長兄は家族の北条市におり、第一回出征で上等兵で帰り、その後三回、合計四回の召集を受け、曹長になり、最後はシベリヤへ抑留され、昭和二十四年に帰っ

て来ました。

我が家は、父は日露戦争に出兵、ラッパ卒で上等兵で帰るといふ軍人一家でした。長兄は今申したとおりシベリヤ抑留者ですが、日ソ開戦時、対ソ戦で左の肩から右の背にかけて銃弾が貫通し、今でも弾の出口の傷は大きく残っているのですが、その負傷のままシベリヤで強制労働させられました。無事帰還したのです。

親子四人外地で戦い、幸いにして皆生還することができたのですが、若い時から父から鍛錬されて育った我々は気力、体力と運のお陰です。そのため全員復員し、現在は、それぞれ家業に精励していますが、二度としてはならぬ戦争であり、あの光景は死ぬまで忘れることはありません。

海軍生活の思い出

愛媛県 石川 幸一

私は昭和十八年八月七日佐世保第二海兵団へ、現役兵として入隊しました（甲種合格）。

私の入隊当時の家族の状況は、

父 健在 農業 七十三歳

母 〃 〃 六十八歳

姉四人 〃 全員結婚して他家へ

本人 〃 製紙会社勤務

その他兄弟妹なし

ということ、両親は高齢のため私が入隊しての不在中は、長姉の夫（住友の会社へ勤務して毎日汽車で通勤中）が約三年間、私の代行として農業のみならず家事一切を切り回してくれました。有り難いことと、銃後の守りを完全にしてくれた義兄への感謝でいっぱいです。

さて、出発のときは郷里のお宮へ集まり、私は、総勢六人の代表となって、見送りの人々へあいさつをして、歓呼の聲に送られて駅まで行進、車中の人となつて佐世保へ向かいました。

第二海兵団へ入隊して新兵教育を受けました。軍人